

研究報告

看護学生の看護観の変化－入学当初と看護見学実習後の比較－

木村裕美子¹⁾、三上れつ¹⁾¹⁾中部大学 生命健康科学部保健看護学科

要 旨

本研究の目的は、看護学生の入学時、映像教材「あなたの声が聞きたい」の視聴後、初めて病院で看護を経験した看護見学実習後、の3つの時期の看護観について、学生自身がどのようにとらえているのか明らかにすることである。大学2年次看護学生30名の自由記載調査紙の内容から、それぞれの時期の看護観とその変化を質的記述的に分析した。

大学入学時の看護観は【医師の補助】が最も多く、その他は【患者の身の周りの世話】など看護の内容であった。「あなたの声が聞きたい」の視聴後の看護観には【医師の補助】が消え、【看護の独自性】など看護の中身が現れ、看護の対象も入学時の【患者に寄り添う】から【家族にも寄り添う看護】へと拡大していた。看護見学実習を経験した現在の看護観は、「あなたの声が聞きたい」の視聴後とほぼ同じ内容ではあるが、【退院後を見据えた生活援助】へと看護の内容が深まり、知識・技術・態度など看護に必要な要素、様々な視点からアプローチする能力や根拠をふまえて最善の看護を考える能力といった内容の【専門職としての目標】が最も多く出現した。入学当初の漠然とした看護のイメージが看護の専門性を表した看護観へ変化したのは、映像教材「あなたの声が聞きたい」によって心が揺るがされ、看護見学実習で日常生活援助が患者の回復を助ける重要な看護ケアだと認識する体験をしたからではないかと考えられた。

1 はじめに

看護観とは、個人の看護に対する考え方や信念である。そして、看護実践を支えるものは看護観であり、看護観は看護ケアに表現され、看護の発展には方法論や技術論のみならず看護観が必要である¹⁾。つまり、看護実践には、専門知識や技術の修得のみならず、その基盤となる看護観の深化が不可欠であるといえる。昨今では、看護師養成課程入学者の志望動機は、資格の取得や周囲に勧められて何となくで、必ずしも看護師を目指していないなど、多様化してきている²⁾。このような学生に対して、早期から看護観を育成するように関わることは、学生が“看護”に関心を持ち、臨地実習においても看護の対象により良い看護を提供しようとする主体的な学習姿勢につながる。また、看護師になるためのモチベーションを高めることや職業的アイデンティティ形成の一助となるため重要である。

看護観の育成のためにA大学では、看護学の基礎となる知識や考え方を学ぶ看護学概論の授業第2回目に映像教材として『あなたの声が聞きたいー「植物人間」生

還へのチャレンジ』を視聴させている(以下、「あなたの声が聞きたい」とする)。この映像の視聴は、看護学生が看護の概念を学習するための有効な教材である³⁾と評価されている。学生の視聴後の感想文には「看護の独自性」の気づきや看護への感動が書かれており、これらは専門職としての看護実践の基盤となる看護観の芽生えであると考えられる。看護学生の看護観は授業により形成されることは一般的に認識されており、臨地実習により変化・発展していくことも研究で示されている⁴⁾⁵⁾。しかし、看護観を育成するためには、看護学生がどの時点でどのような看護観を持っているのかを把握して介入することが有効であると考ええる。

そのため本研究では、A大学看護学生の入学時の看護観と映像教材「あなたの声が聞きたい」の視聴後の看護観、初めて病院で看護を経験した看護見学実習後の看護観について、学生自身がどのようにとらえているのかを明らかにした。

II 研究目的と意義

入学時の看護観と映像教材視聴後の看護観、看護見学実習後の看護観について、看護学生がどのようにとらえているのか明らかにする。研究の意義としては、学生が自分の看護観や考え方を深めることは、職業的アイデンティティの発展に寄与することが期待できる。また、看護学概論や基礎看護技術の授業および臨地実習履修前の学生に対する教育内容や教育方法など、看護観を発展させるための教育的関わりの示唆が得られると考える。

III 方法

1. 研究デザイン

本研究は、質的記述研究である。

2. 研究対象者

A 大学の看護学を専攻する2年生 108名の男女。

研究対象者は、学内実習を含む生活援助技術・治療支援技術・フィジカルアセスメント技術を習得し、医療施設で3日間の看護見学実習(2年次9月)を履修している。

3. 調査時期

看護見学実習終了から6週間後の2018年10月19日

4. データ収集

- 1) 研究対象者が受講する授業終了後に、研究説明を施行した。研究対象者に、入学当初に書いた「あなたの声が聞きたい」視聴後の感想文と、研究概要と倫理的配慮が書かれた研究協力依頼文書を配付し、研究協力を承諾する学生のみ、教室に残ってほしい旨を説明した。
- 2) 教室に残った研究対象者に自記式の調査紙を配付し、研究目的および方法について説明した。
- 3) 質問項目は、「看護とはどういうものだと考えていましたか/いますか」とし、①大学入学時、②「あなたの声が聞きたい」のビデオ視聴後、③看護見学実習を経験した現在、の3つの時期について、それぞれ自由記述するように説明した。なお、大学入学時は当時を振

り返り、「あなたの声が聞きたい」の視聴後は返却した感想文を参考するように説明した。

- 4) 調査紙は留置き法で回収した。

5. 分析方法

- 1) 分析の手順は、研究対象者個々の調査紙の記述を、①大学入学時、②「あなたの声が聞きたい」の視聴後、③看護見学実習を経験した現在、の3つの時期毎に、質的帰納的に分析をした。
- 2) 1文を意味ある文節で区切り、1記録単位が1つの看護観を含むようにコード化した。ただし、文章ではなく単語のみが記述されていた場合は、単語をコードとした。文字が読み取れない記述および看護観を示すものではないと判断した記述は、データとして除外した。
- 3) 個人から抽出したコードを研究対象者全体でつき合せ、共通性・相違性に従って分類した。分類したコードの共通性を見出して、カテゴリーとして命名した。
- 4) 上記2)3)の工程について、共同研究者と推敲を重ね、信頼性を確保した。
- 5) 3つの時期について同様の分析を行い、大学入学時から看護見学実習後の看護観について、研究対象者がどうとらえているのか、またどのような変化があるのか分析を行った。

IV 倫理的配慮

研究対象者には、研究の趣旨・目的・方法を説明し、研究への参加協力の自由意志の保証、調査紙は無記名であり記述から個人は特定されないこと、そのため研究への協力/非協力が成績に影響することはないこと、データ(調査紙の記述内容)は研究目的以外には使用しないことを、研究協力依頼文書および口頭で説明をした。なお、未成年の研究対象者には、研究協力依頼文書を保護者にも見せるように依頼をした。

本研究は、中部大学研究倫理審査委員会の承認を得て行った(承認番号300055)。

V 用語の操作的定義

看護観:個人の看護に対する考え方や信念であり、自己の看護実践の基盤となる哲学

看護見学実習:看護学生が、初めて医療施設で看護師に同行し看護を経験する実習

VI 結果

30名の学生から研究協力が得られた。以下文中の【 】はカテゴリー名を示し、カテゴリー内の()にはコード数、すなわち記述した研究対象者の人数を示した。

1. 大学入学時の看護観

30名全員から記述が得られ、分析から46コードが抽出され、8カテゴリーに分類した(表1参照)。

【医師の補助(14)】【患者の身の周りの世話(9)】【患者に寄り添う(7)】【人のためになる仕事(5)】【身体的・精神的ケア(4)】【観察とコミュニケーションが大切(3)】【医師との連携(2)】【決められた仕事(2)】と命名した。

【医師の補助】は、医師の手伝いや医師の指示で動く、注射をするといった内容であった。一方、【患者の身の周りの世話】【患者に寄り添う】【身体的・精神的ケア】は、患者に寄り添い、入院中の患者の世話や精神面でもケアするという、看護の内容であった。また【決められた仕事】は、看護の仕事はルーティンで行うという内容であった。

2. 「あなたの声が聞きたい」の視聴後の看護観

28名から記述が得られ、分析から42コードが抽出され、6カテゴリーに分類した(表2参照)。

【看護の独自性(18)】【患者中心の看護(9)】【個別性をふまえたケア(6)】【家族にも寄り添う看護(5)】【ヘルスケアチームとの協働(3)】【人のためになる仕事(1)】と命名した。

【看護の独自性】には、医師の指示ではなく、看護師自らが患者のケアを考え実施する、患者をより良い方向に変化させるために行う生活援助についての内容であった。【患者中心の看護】は、患者を中心として、寄り添い、尊重する看護の提供について記述されていた。【個別性をふまえたケア】は、回復には患者一人一人異なったケアが必要で、その人に合った看護を提供するという内容

で、患者だけではなく【家族にも寄り添う看護】や、チームで患者を支援する【ヘルスケアチームとの協働】についての記述も見られた。

3. 看護見学実習を経験した現在の看護観

29名から記述が得られ、分析から52コードが抽出され、7カテゴリーに分類した(表3参照)。

【専門職としての目標(16)】【個別性をふまえたケア(10)】【退院後を見据えた生活援助(10)】【信頼される患者—看護師関係(9)】【ヘルスケアチームとの協働(4)】【家族にも寄り添う看護(2)】【人のためになる仕事(1)】と命名した。

【専門職としての目標】の内容は、知識・技術・態度など看護に必要な要素、様々な視点からアプローチする能力や根拠をふまえて最善の看護を考える能力、安全と効率をふまえた看護の提供といった内容であった。【退院後を見据えた生活援助】には、日常生活の自立支援や患者が安全に生活するための環境づくり、退院後の生活を考えたケアなどの内容であった。【信頼される患者—看護師関係】は、患者やその家族の観察やコミュニケーションを通して築く信頼関係が必要であるという内容であった。

4. 入学当初と看護見学実習後の看護観の比較

表4より、大学入学時の看護観は【医師の補助】が最も多く、その他は【患者の身の周りの世話】など看護の内容であった。「あなたの声が聞きたい」の視聴後の看護観には【医師の補助】【決められた仕事】が消え、【看護の独自性】など看護の中身が表れ、【患者に寄り添う】から【家族にも寄り添う看護】へ拡大した。看護見学実習を経験した現在の看護観は、「あなたの声が聞きたい」の視聴後とほぼ同じ内容ではあるが、【退院後を見据えた生活援助】へと看護の内容が深まり、【専門職としての目標】が最も多く出現した。

また、表1・表2・表3を比較すると、表1に比べ表2・表3では単語は少なくなり、一文の記述内容量が増えていた。

VII 考察

1. 3つの時期の看護観の変化

表4より、大学入学時の看護観は、まだ看護に対する考え方というよりは、看護または看護師に対するイメージを示していると考えられる。学生自身や家族の入院などで、実際の看護の現場を見たり体験したりした学生はいるが、多くはテレビドラマやドキュメンタリーの中で看護師が医師の指示を受けて注射等を行う姿や部分的な生活援助の場面から【医師の補助】や【患者の身の周り世話】が看護であると認識し、その患者とのやり取りから、看護とは【患者に寄り添う】【人のためになる仕事】であると考えていることが推測された。

「あなたの声が聞きたい」は、植物状態になった患者が、医師の治療ではなく、看護師が行う根拠に裏づけされた画期的な独自の看護プログラムにより回復していくというドキュメンタリーである。この視聴は、学生が持つ「看護が【医師の補助】をすることや【決められた仕事】である」というイメージを払拭し、【看護の独自性】【患者中心の看護】【個性をふまえたケア】【ヘルスケアチームとの協働】が患者の回復を助け、看護の対象は患者だけではなく【家族にも寄り添う看護】という、本来の看護を知るきっかけとなっていた。

看護見学実習を経験した現在は、入院中の患者になんでも「やってあげる」ことが看護ではなく、【退院後を見据えた生活援助】を提供することがセルフケアの支援や継続看護につながることを知り、ケアやコミュニケーションを通じて築かれる【信頼される患者－看護師関係】を感じ取っていた。そして、これらを実践するためには、最善の看護を考える専門職としての能力が基盤として必要であることを認識し、それが自分の【専門職としての目標】として看護観に表れたと考える。

これより、入学当初は【医師の補助】が中心であった学生の看護観は、「あなたの声が聞きたい」の視聴により【看護の独自性】を実感し、看護見学実習で既習の知識と実際の看護が結びついたことで、【専門職としての目標】が看護観として表れたのではないかと考える。

2. 学生の看護観を育成する方法

前述したように、学生の看護観は入学当初と看護見学

実習後で変化があることが明らかになった。その要因として教材と臨地実習が考えられた。畑中らは「看護観の形成には自己の看護観を揺るがされたり、重要な看護ケアだと認識することのできる体験が必要である」⁶⁾と看護師の看護観の形成プロセスを分析している。本研究対象者は看護学生であるが、入学当初の漠然とした看護のイメージが看護の専門性を表した看護観へ変化したのは、映像教材「あなたの声が聞きたい」によって心が揺るがされ、看護見学実習で日常生活援助が患者の回復を助ける重要な看護ケアだと認識する体験をしたからではないかと推察する。柳澤らの取り組み⁷⁾では、日常生活援助を受けた当事者(入院経験がある患者)の語りを聞く授業から、初年次看護学生は患者の苦痛や我慢を知り、援助的関係を考慮した看護観が形成されていた。そのため、学生の看護観を育成する教材としては、看護の独自性を内容とする映像や患者の生の声を聞くような機会など、学生の看護観に刺激を与えるものの選択や工夫が必要であると考えられる。

臨地実習については、1年次の看護学概論を習得後、生活援助技術を学習する前に医療施設に入院する患者とふれあうなどの機会があれば、授業内容と患者の生活や苦痛・不安等の心情が結びつき、早期から学生の看護観を育むことにつながるのではないかと考える。そして、教材を使用した授業や臨地実習で芽生えた看護観は感じるだけに終わらず、レポートなどに記述させ考察させることによって、学生個々の看護観を認識させ、体験による自身の変化を感じ取らせることが看護観を深化させる教育につながると考えられた。

3. 研究の限界と課題

大学入学時と「あなたの声が聞きたい」の視聴後の看護観は、看護見学実習を終え入学後1年半を経過した時期に当時を振り返り記述されたものであるため、看護見学実習で実際の看護の現場を見て影響された内容が含まれていた可能性もある。今後は、1大学であっても、看護観の変化とその影響要因等の縦断的研究ができるように継続的に学生の看護観の変化を把握すること、看護観を深化・拡大させるための教材研究や教育技法等の検討を行うこと、看護観育成と職業的アイデンティティ

や専門職自律性との関連などについても追究していく必要がある。

VIII 結論

A大学の看護学を専攻する2年生30名の看護観を3つの時期から明らかにした。

①大学入学時の看護観は、【医師の補助】【患者の身の周りの世話】【患者に寄り添う】【人のためになる仕事】【身体的・精神的ケア】【観察とコミュニケーションが大切】【医師との連携】【決められた仕事】の8カテゴリーであった。

②「あなたの声が聞きたい」の視聴後の看護観は、【看護の独自性】【患者中心の看護】【個別性をふまえたケア】【家族にも寄り添う看護】【ヘルスケアチームとの協働】【人のためになる仕事】の6カテゴリーであった。

③看護見学実習を経験した現在の看護観は、【専門職としての目標】【個別性をふまえたケア】【退院後を見据えた生活援助】【信頼される患者－看護師関係】【ヘルスケアチームとの協働】【家族にも寄り添う看護】【人のためになる仕事】の7カテゴリーであった。

以上より、映像教材や臨地実習の影響で学生の看護観は変化していくことが示唆された。

謝辞

研究にご協力いただきましたA大学2年生の看護学生の皆様に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 薄井坦子. (1997). 科学的看護論(第3版). 日本看護協会出版会, 東京.
- 2) 押尾知子, 小泉知里, 古市清美, 小笠原幸. (2017). 看護学生のとらえる看護師・看護のイメージ「基礎看護学実習I」前後のイメージの変化. 看護実践の科学, 42(1), 48-56.
- 3) 伊藤政子. (2008). 看護の独自性を実感しうる映像教材の有効性－看護を学ぶ初期の学生の反応を分析して－. 横浜創英短期大学紀要, 第4号, 55-58.
- 4) 秋庭由佳, 藤澤珠織, 松島正起, 古橋洋子. (2013). 基礎看護学実習で形成される看護観－レポートの分析を通して－. 青森中央短期大学研究紀要, 26, 67-74.
- 5) 野戸結花, 川崎くみ子, 富澤登志子, 皆川智子, 山内久子. (2005). 成人看護学実習における看護観形成. 弘前大学医学部保健学科紀要, 4(1), 69-74.
- 6) 畑中純子, 伊藤収. (2016). 看護観が体験から発展するまでの看護師の志向プロセス. 日本看護科学会誌, Vol.36, 163-171.
- 7) 柳澤恵美, 林真理子, 小松法子, 今井淳子, 能見清子. (2018). 初年次看護学生が日常生活援助を受けた当事者の語りから得た看護観. 創価大学看護学部紀要, 第3巻, 25-34.

Title: Changes in the nursing philosophy of nursing student – Comparison between early enrolled time and after the fundamental nursing practicum –

Author(s): Yumiko Kimura ¹⁾, Retsu Mikami ¹⁾

Address: ¹⁾ Department of Nursing, College of Life and Health Sciences, Chubu University, 1200 Matsumoto-cho, Kasugai, Aichi 487-8501, Japan;

Keywords: Nursing philosophy, Nursing student, Change

表1. ①大学入学時の看護観

対象者 No.	コード (46)	カテゴリー
2 5 9 10 13 16 17 18 20 23 24 25 26 29	お医者さんの手伝い 医師の補助 医師の指示で動く 注射をしたりする 治療を支援する 医師の手伝いを行う 医師の診療の補助をするもの 病気を治す 看護師は医師からの指示を受け、指示通りの行動をし、医師の補助をする 医師の指示に従って患者の全介助に努める 病気の予防、病気の早期診断、早期治療、奇形の場合のリハビリテーションによる健康増進を行う 医師の補助 看護師はただ単に医師の補助をする立場 医師の補助をする	医師の補助 (14)
1 2 3 6 10 11 12 15 17	患者の病院での生活を助ける 入院時の患者さんのお世話 入院している患者さんの世話 患者さんの身の周りの世話をする 患者さんの生活を支える 病院にいる人にケアする 患者さんのお世話をする 患者さんを退院まで援助する 患者の身の周りの世話	患者の 身の周りの世話 (9)
8 13 15 19 21 21 28	患者中心 患者に寄り添う 患者さんの気持ちに寄り添う 患者に寄り添う看護 優しさ 寄り添い 患者に寄り添ってケアする	患者に寄り添う (7)
4 14 22 24 27	多くの知識と技術を習得する必要がある 病気にかかり、困っている人を助ける 患者と目標に向かって一緒にがんばっていく 看護とは、日常生活の中で人々を扱う職業 看護は人のためになるやりがいのある仕事	人のためになる 仕事 (5)
8 18 28 30	身体面、精神面で支える 精神的ケアを行う 患者に身体的・精神的にケアをする 患者を身体面だけではなく、精神面でも看護する	身体的・精神的なケア (4)
16 16 28	看護は患者を観察すること 看護は患者とのコミュニケーションによって行う 患者とのコミュニケーションを大切にする	観察とコミュニケーションが 大切 (3)
4 23	医師との連携を大切にする 看護師は医師とだけの関わりが多い	医師との連携 (2)
7 23	勉強すれば誰でも患者に対して看護できる どの患者に対しても似たような援助を行う	決められた仕事 (2)

() はコード数、すなわち記述した研究対象者の人数を示す

対象者No.は無記名調査紙にランダムに割り当てた1～30の番号で、研究対象者個人を示す

表2. ②「あなたの声が聞きたい」の視聴後の看護観

対象者 No.	コード (42)	カテゴリー
2 2 6 9 9 10 12 15 17 20 23 24 26 27 28 28 28 29	看護には独自性がある 観察、コミュニケーションを通して、自らケアの計画を立てて実施する 看護で患者の状態が変わる 看護は独自の働きをする 医師の指示だけではなく、違った角度からのアプローチで患者さんに関わるもの 患者さんの生活を元の生活に近づける 看護師が自ら行動を起こす 患者さんをより良い方向に変化させる 時間をかけて、患者の症状が改善するように努める 医師の指示に従うだけでなく、独自の治療法を考える 医師の指示に従うだけでなく自律した看護が必要 疾病のために日常生活ができない患者の生活援助を行う 患者さんの身の周りの世話やお手伝いをする 看護はただ治療ができれば良いというものではなく、ケアが重要になる 患者に適切なケアをプログラムを提供すること その人のできる能力を最大限に活かす 寝たきりの状態から少しでも回復できるようにケアする 医者の手伝いではなく、入院した患者がよくなるための援助	看護の独自性 (18)
5 7 7 8 10 13 16 20 21	患者に寄り添う 患者を第一優先とすること 患者の気持ちの尊重が大切 患者中心 患者さんの尊厳を守る人 治療を前向きに受けられるように患者を支援する 看護とは支えるもの 患者に寄り添う 看護は医師や他職種と違い、患者の一番近くに寄り添うもの	患者中心の看護 (9)
13 14 14 23 28 30	患者1人1人に合った看護を行う 患者さんに合った支援をする 患者さんに無理のない範囲で援助をする 患者のその時その時の状態に合わせて看護プログラムを作成する 患者の症状や感情の変化を読み取る その人らしい生活を少しでも取り戻すために、ADLの向上に向けた方法を実践していく	個別性を ふまえたケア (6)
1 4 16 17 25	患者だけでなく、家族の支えにもなる 患者さんの家族にも配慮していく 患者さんはもちろんのこと、家族をよく見て、配慮し、言葉をかけて支える 患者だけでなく、患者の家族にも寄り添う 患者のみならず、その家族も支える	家族にも 寄り添う看護 (5)
17 28 30	看護師同士協力して、患者の症状改善に努める 看護師間で協力してケアする 患者の状態をチーム（看護師だけではなく多職種）で判断する	ヘルスケアチームとの 協働 (3)
29	援助を行い、よくなったときに喜びを感じられる	人のためになる仕事 (1)

() はコード数、すなわち記述した研究対象者の人数を示す

対象者No.は無記名調査紙にランダムに割り当てた1～30の番号で、研究対象者個人を示す

表3. ③看護見学実習を経験した現在の看護観

対象者 No.	コード (52)	カテゴリー
2 4 6 9 14 15 16 20 21 22 23 23 27 28 28 30	患者にとって最善の看護とは何かを考える 必要な情報が何かを考え、根拠をもって患者とコミュニケーションをとる いろいろな方向から考えなくてはいけない深い分野 専門職種として自律する 患者の状態を把握して、どの援助をするのが一番良いのかを考え、ケアを提供する 安全と効率性を特に重視した看護 看護師1人1人、自分の看護を持っている 患者の立場になって、より良いケアを考え、提供する 科学的根拠に基づく、確立された医療の一部 看護師には、人々がより健康になるための知識や技術が必要不可欠 看護師には、医療チーム内で自分の意見を言える能力・他の人の意見を受け入れる能力が必要 患者に興味を持ち、どんなケアが必要なのか考える 看護は多くの知識・技術を必要とする 患者の状態に応じたケアを行うためには、知識・技術・態度の3つを踏まえた看護が必要 そばにいないだけでは看護ではなく、適切な知識と技術を持ち、観察することが重要 患者の身の周りの環境から、患者の行動・感情などを自ら気づき考える感性が看護師としての力量となってくる	専門職としての目標 (16)
5 7 8 10 12 13 16 23 26 28	個別ケアが大事 その人に合う看護ケア提供を考えて、実行し、看護計画を変えていくことが大切 個々に合わせた看護 個別性を大切にしたいケアを提供するために、患者さんとコミュニケーションをとりながら情報収集を行う 患者さんの情報や背景などすべてをふまえた上で、看護目標を立てる 患者だけではなく、患者の背景を考慮し、治療を支援する 患者の状況や状態をふまえて、個別性に配慮して観察やケアを行う 患者それぞれには必要なケアが違う 患者さんの普通に近づけるよう、その人に合った援助を行う 患者の状態に応じてケアを行う	個別性を ふまえたケア (10)
1 3 8 10 12 23 24 24 25 29	患者の「病院」での生活だけでなく、自宅に戻ってからの生活も支える 入院中だけでなく、その後の患者さんの生活を考えてケアを行う 入院－退院後までの支援 個別性を大切にしながら、治療やその後の新しい生活を考えてケアすること 自立、退院、転院に向けたケアを提供する 患者に全介助を提供するのではなく、患者が一人で行えることは患者に行ってもらうなど、ADLの低下予防をするのも看護 患者が自分自身で自己ケアおよび日常生活ができるように、健康状態の向上を援助する 病気のために日常生活ができない人を援助すること 患者の生活の補助をする 患者が安全・安心に生活することができるような環境づくりをする役割	退院後を見据えた 生活援助 (10)
8 9 18 18 19 22 25 25 27	患者の声にならない声を読み取る 患者との触れ合い、信頼関係に基づき、心身を支える 看護師は、患者にとってケアを提供してくれる大切な存在 看護師は、患者への声かけをとおしてコミュニケーションをとる 寄り添うだけではなく、患者のことを考え、言わないといけないことは言う 患者のことを思って観察する 患者に寄り添い、信頼関係を築く 患者・家族の意見を尊重すること 看護は病気をもっている人にとって、なくてはならない	信頼される患者－ 看護師関係 (9)
2 9 23 29	個人で行うのではなく、カンファレンスを開いて、みんなで患者の最善策を考える 専門職種として他職種と協力する 看護師同士あるいは他の医療職とコミュニケーションをとり、患者のケアについて 医師と患者の橋渡しをする役割	ヘルスケアチームとの 協働 (4)
1 11	家族の不安も軽減させる 患者のケアだけでなく、家族のケア/サポート/寄り添いなど、様々なことをする	家族にも 寄り添う看護 (2)
27	看護にはやりがいがある	人のためになる仕事 (1)

() はコード数、すなわち記述した研究対象者の人数を示す

対象者No.は無記名調査紙にランダムに割り当てた1～30の番号で、研究対象者個人を示す

表4. 入学当初と看護見学実習後の比較

①大学入学時の 看護観 (46コード)	②「あなたの声が聞きたい」の視聴後の 看護観 (42コード)	③看護見学実習を経験した現在の 看護観 (52コード)
医師の補助 (14) 決められた仕事 (2)		専門職としての目標 (16)
患者の身の回りの世話 (9) 身体的・精神的なケア (4)	看護の独自性 (18) 患者中心の看護 (9) 個別性をふまえたケア (6)	退院後を見据えた生活援助 (10) 個別性をふまえたケア (10)
観察とコミュニケーションが大切 (3)		信頼される患者－看護師関係 (9)
患者に寄り添う (7)	患者の家族にも寄り添う看護 (5)	患者の家族にも寄り添う看護 (2)
医師との連携 (2)	ヘルスケアチームとの協働 (3)	ヘルスケアチームとの協働 (4)
人のためになる仕事 (5)	人のためになる仕事 (1)	人のためになる仕事 (1)

() はコード数、すなわち記述した研究対象者の人数を示す